

月本雅幸教授を送る

井島 正博

月本先生に最初にお目にかかったのは、私が本郷に進学した一九八〇年、月本先生はその年に博士課程に進学なさっている。当時は研究室でお見かけすることは滅多になかった。塾講師としてお忙しい由でもあったが、当時は自分の研究は自宅で進めるものであって、大学に来るのは講義・演習に出席するためか、演習の準備のため自宅にはない本を見に来るためであった。

そのような事情で、その頃はあまりお話しすることはなかったが、翌一九八一年には月本先生は茨城大学に専任講師として就職なさる。そんなに短かったのかと改めて思うが、学生時代に御一緒したのはその一年だったことになる。その後、一九八五年に白百合女子大に転任なさり、一九八七年には助教に昇進なさるのだが、その間、国語学会（現日本語学会）の庶務委員として辣腕を振るっておいでの噂は耳にしていた。日本語学会大会で、発表内容が審査されたものとは違って、補足資料をプリントしてきた発表者に対して、それは審

査を通った内容ではないと厳しく叱責された、とも聞こえてきた。

その後、一九九二年には東京大学助教として本学に戻っておいでになる。一九八六年に定年退官なさった築島先生の訓点語研究を受け継ぐ形で、以後は高山寺の資料調査などをマネジメントする中心人物として尽力なさることになる。ちなみに私が東京大学に転任したのは一九九八年だが、月本先生との密なお付き合いはそれからということになる。

私が着任してからも、さらにその上には白藤先生、坂梨先生、鈴木先生、尾上先生と何人もの先生がおいでになったが、その当時は年少の助教授同士ということで、学内の事情をいろいろと教えていただいたり、相談したりすることも多かった。本誌『日本語学論集』も、私が研究室に研究誌がほしいと言うと、月本先生はいくつかの方策を教授して下さった。一番の問題は、経費の問題であったが、当時の学部長や国文学研究室にも話を持ちかけても不調に終わった。結局、経費

を削減するために現在のような校正なしの版下入稿という形になった。それも本誌で十六号、すなわち、二〇〇五年に創刊号を発刊してから十六年も経つことになった。

そのようなわけで、月本先生とははからずも二十二年にわたってお付き合いすることになったのだが、月本先生といえれば東京大学文学部の中でも一風変わった人物として通っている。まず第一には、その大学への行き帰りの風貌が挙げられる。大きな黒い鞆を肩から提げ、郵便局からお買い求めだという丈夫な紙袋にいっぱい荷物を手に持っておいでになる。それではその袋の中には何が入っているのか。それこそ思い付くありとあらゆるものが入っているのである。あるとき、教員の一人がこのような形の封筒はないか、と独り言を言うと、それならあります、と当該の袋の中から封筒が出てきたこともあった。またある教員がこれこれの大学の住所はわからないか、と言うとそれならわかります、と住所録が出てきたこともあった。そのように、月本先生の大学への行き帰りの姿は、万一の事態にも対応できる姿であった。

それから、月本先生の個人研究室および共同研究室内の主任の部屋は、本と書類の山に埋まっており、時折表層なだけも生じており、「ごみ屋敷」とも呼ばれている。しかし、月本先生によれば、これらの書籍と書類とはきちんと整理されているそうで、さる会議で、数年前の教授会でこれこれの資料があったはずだ、と言われると、席を立てて五分後にその

資料が示されたこともあった。また外部の学生が国語研究室に見聞きしたこともない資料について尋ねてきた際、個人的なものだがと断りつつ、即座にその資料をご呈示になった際にはさすがに舌を巻いた。

もうひとつ、月本先生はおそらく文学部の教員の中でも、とりわけ夜遅くまで研究室にとどまっていらつやつた。大学の近くで呑み会がある時なども、月本先生は荷物を持っておいでになることはなく、どうしたんですか、と尋ねると、また研究室に戻るから、とお返事になるのが通例であった。

いったいそれでご自宅に帰宅できるのだろうか、といぶかることもあったが、実はその間、学部学生や大学院生に研究室で勉強をさせていらつやつたのであった。東大は研究室に貴重書があることもあり、研究室を大学院生に管理させることをしないが、月本先生は個人的な裁量で大学院生の研究を支援なさってきた。その成果として、ここ数年の大学院生が名だたる大学に就職してきた。

このように、東京大学国語研究室に大きな足跡を残してきた月本先生が本年定年で退職なさるのは、国語研究室としても大きな痛手なのではあるが、月本先生のこれまでの貢献に感謝しつつ、研究室の雑事から解放されてますますの研究のご発展を祈念したい。

(いじま まさひろ 大学院人文社会系研究科 教授)